

惜別

袴田巖さんの再審請求を支援した元裁判官

くまもと のりみち
熊本 典道 さん

「死刑判決は裁判官の全員一致であるべきだ」と話していた熊本典道さん＝2008年

11月11日死去(急性肺炎) 83歳

「お檣の舟に箸の櫂、法曹界に乗り出した。我等は未だ一寸法師」
茶色く変色したわら半紙。57年前、任官間もない同期の裁判官で作ったという通信誌「いっすんぼうし」の創刊号は、こんな一文で始まる。編集世話人の一人が熊本さんだった。
夢や使命感に躍るような寄稿文の数々。「博識で、弁も立つて。世の中には頭のいい人間がいるものだ」と。同期で弁護士の木谷明さん(83)が懐かしそうに振り返る。

東京地裁、福島地裁支部を経て1966年、静岡地裁に赴任。その年に静岡県で起きた一家4人殺害事件の被告、袴田巖さん(84)の公判を担当し、死刑判決を書いた。「袴田事件との遭遇は、彼にとつて不幸な偶然でした」と木谷さんは言う。

半年後に辞職。消息も途絶えたが、2007年に突然姿を現し、当時の経緯を告白した。「自白に疑問を抱き無罪の判決

自ら書いた死刑判決 深く悔い

文を書いたが、裁判長ら3人の合議で多数決に敗れ、死刑判決に書き換えた」。元裁判官として異例の行動だった。

自責の念から酒におぼれ、家族と別れ、自殺も試みたという。「袴田さんに会って謝りたい。最後はまるでそのため生きていくようでした」。牧師の田宮宏介さん(63)は、がんや脳梗塞で不自由になった晩年を近くでみつめてきた。

14年、静岡地裁の再審開始決定で袴田さんが47年ぶりに釈放された。18年、入院中だった福岡市内の病室を袴田さんと姉の秀子さん(87)が見舞う。「いわお」「わるかった」。ベッドでかすれた声を振り絞った。

その後も入院を続けた。そばで支えた内縁の女性には若い判事補時代を懐かしみ、思い出を語っていたという。再審は18年に東京高裁が決定を取り消し、最高裁で審理が続く。自ら書いた死刑判決の行方は、見届けられなかった。(高橋淳)

門間ゴスペルファミリー

1986年夏、門間一家(正輝、幸枝夫妻と小学生の長男愛輝、次男直輝)は、全財産を投じて「過去の戦争を見つめ、未来の平和を創る、「ピースボート」に参加した。その船上、中南米で最も貧しい国ハイチの現状を訴える「メッセージコンサート」をはじめて開いた。このツアーを通して「あるはずがないと思っていたことが、いっぱい起こっている」世界の現実を目を開かされた。

1987年、アマチュア・コーラス「ゴスペルファミリー」として、人権を訴えるいろいろな集会で歌いはじめた。関わってきた人権問題は、ハイチの民主化、南アフリカのアパルトヘイト廃絶、東ティモールの独立、パレスチナの解放、日本のダイヨーカンゴクとえん罪、死刑廃止、脱原発、環境破壊問題、アジア観光ツアーと子ども売春根絶、PKO海外派兵と戦争への道に反対、日本が侵した過去の戦争犯罪の懺悔、元従軍慰安婦への補償など幅ひろい。

1990年6月、コーラス・アルバム「コイノニアー愛の交流で地上に平和を！」を発表、その収益はすべて内外の人権活動基金に向けられてきた。

「ゴスペルファミリー」のコーラスは、聖歌やゴスペルフォークソング、民衆のための民衆による民衆の歌から選ばれ、「心をつなげて奏でる音楽からは、人を思う優しさにあふれた素晴らしいハーモニーが伝わってくる」(ミニコミ紙「村山三里」)。

1991年8月、ジュネーブの国連を訪れ、その後ヨーロッパをまわり、リスボンの東ティモール難民居住区、スペインの「ベンボスタ子ども共和国」、オランダのNOVIB、インドネシア・コミッティ、そしてIFOR(国際友和会)の方々と交流、コーラスと共に無実の死刑囚パウロ袴田巖さんの再審を訴えて、国際署名を募り、1993年9月、静岡地方裁判所に第一次集約を提出した。その後も全国各地でメッセージコンサートを開き、その中で袴田巖さんのえん罪を訴えてきた。1992年1月、門間正輝は「無実の死刑囚・袴田巖さんを救う会」の代表に就き、幸枝は副代表を務めている。



- ・1994年7月、NHK「列島リレードキュメント—東村山市門間さん一家」出演
- ・1996年9月、日本テレビ「心のともしび—ゴスペルファミリーを招いて」出演

～門間ゴスペルファミリーのパンフレットより～

ジュネーブの国連正門前で(星野博之撮影)